



共生するお掃除ロボット

例えば「ルンバ」という名前を聞いたことがあると思う。テレビなどでもCFが流れているお掃除ロボットである。先日ある番組で「このお掃除ロボットは、あるマシンを改良して誕生したのだが、その元のマシンとはどんなものだったか？」というクイズをやっていた。さて、何でしょう？ 答えは「地雷の探査機」。戦争が終結した後、埋められたままになっている地雷を撤去する際、それを探すのに活用される機械だったそうだ。なるほど、そう言われればわかるような気がする。

君たちの家にもある？ 国語科の先生のお一人がお持ちなのだが、「フローリングでは結構役立つ」とおっしゃっている一方で、「床に例えば新聞紙が落ちていたりするとダメだから、手間がかかる面もある」ともおっしゃっている。床に大きなモノがあるとうまく動作しないというのなら、ちょっと買うのは躊躇してしまうといったところだろうか。

さて、そんなお掃除ロボットと関係する面白い文章があるので紹介しよう。こういう視点もあるのだなあ…と感心する。

＊

ひとりで勝手にお掃除してくれるロボット。その能力を飛躍的に向上させるなら、わたしたちの仕事をいつかは奪ってしまうのではないかと心配する向きもある。しかし、もうしばらくは大丈夫なのではないかと思う。一緒に暮らしはじめてみると、その＜弱さ＞もいくつか気になるのだ。

玄関などの段差が落ちてしまうと、そこからなかなか這い上がれない。部屋の隅にあるコード類を巻き込んでギブアップしたり、時には椅子やテーブルなどに囲まれ、その袋小

路からぬけだせなくなりそうになる。「アホだなあ…」と思いつつも、そんな姿になんともなくほっとしてしまう。

こうした関わりのなかで、わたしたちの心構えもわずかに変化してくる。ロボットのスイッチを入れる前に、部屋の隅のコードを束ねはじめる。ロボットの先回りをしては、床の上に乱雑に置かれたモノを取り除いていたりする。いつの間にか、部屋のなかはきれいに片づいている。このロボットの意図していたことではないにせよ、周りの手助けを上手に引きだしながら、結果として「部屋のなかをお掃除する」という目的を果たしてしまう。これもまさしく＜関係論的なロボット＞の仲間だったのである。

先に述べたように「コードを巻き込んで、ギブアップしやすい」といのは、一種の欠陥や欠点であり、本来は克服されるべきものだろう（実はいつの間にかパワーアップされたお掃除ロボットの仲間は、こうした欠点を克服しつつある…）。しかし、その見方を変えるなら、この＜弱さ＞は、「わたしたちに一緒にお掃除に参加するための余地や余白を残してくれている」ともいえるのだ。（中略）

お互いの弱いところを開示しあい、そして補いあう。一方で、その＜強み＞を称えあってもいる。人とロボットとの共生という言葉があるけれど、自らをわきまえたお掃除ロボットは、わたしたちとのあいだで、持ちつ持たれつという共生をすっかり成功させているようなのである。

（岡田美智男『＜弱いロボット＞の思考』、講談社ブルーバックス、2017）